

～高田開府四百年と北陸新幹線開業に向けて～ 『高田瞽女どこでもガイド』街なみ観光ツールの開発

上越市は高田開府四百年、さらに平成 27 年春の北陸新幹線開業を控えて、観光交流の最大の機会を得る。海山の自然の恵みと豊かな食、長い歴史と雪国の人情のこまやかさは、観光交流の基盤である。高田瞽女を描いた斎藤真一作品の収集家池田敏章氏から、本会の尽力により貴重な諸作品が上越市に寄贈された。画家が感動した雁木の街並みが残る高田で、絵画に描かれた雪国のまちなみ巡りを充実し、まちづくりの資産として活用するための活動を報告する。

NP0 法人高田瞽女の文化を保存・発信する会
副理事長 関 由有子

1 瞽女を知ることの意味

1-1 短い説明では語りつくせない

「鼓 ツヅミ」という旁の下に「目」を書き、「女」と続けて「瞽女」ゴゼと読む。盲目の女性たちが渡世のために、三味線を弾きながら唄い、求めに応じて長編の段物（祭文松阪）を語る芸能であった。古くは室町時代に記録があり、その頃は鼓を打ち鳴らす芸であったというが、三味線の普及により、江戸時代以降はもっぱら三味線による音曲が主流となった。

一種の旅芸人ではあるが、定住する住居があり、そこから定期的に年間 300 日近い巡業の旅をした。農山村を巡り、大地主や庄屋などの裕福な家が、瞽女に無償の宿と食事を提供して世話をした。瞽女が泊まった夜には村人が集い、唄を聴き、段物に涙して楽しんだ。毎日の厳しい労働と単調な暮らしのなかで、瞽女の到来は唯一の娯楽であり、街の空気を感じる場であった。さすらいの旅芸人との決定的な違いが、この瞽女宿システムであるといえよう。

瞽女の組織は日本各地にあったが、昭和になり娯楽が多様化し始めると、全国的に減っていった。しかし、新潟県には最後まで瞽女が残った。中でも長岡と高田の瞽女は、江戸期から盲女の技芸集団として二大組織を形成した歴史的な裏付けがあった。長岡牧野藩と高田の榊原藩は、瞽女に関する古文書を残している。

しかし、戦後は瞽女を支えた地主階級が崩壊すると、瞽女も消滅への道をたどった。高田の杉本家は昭和 39 年に定期巡業を終え、昭和 58 年に親方の杉本キクイが 85 才で亡くなった。旧黒川村の胎内安らぎの家



瞽女 ゴゼ 市川信夫 書



高田瞽女親方 杉本キクイ

に入所した二人の弟子と長岡瞽女で著名な小林ハル、ほかに現役で瞽女を務めた人々も既にない。

1-2 過去の瞽女ブームと現在

長岡瞽女は、戦災により稼業も記録もほぼ壊滅したが、高田では民俗学者の市川信次氏が瞽女の研究を続けてきた。本会会長の市川信夫氏は、父である信次氏のあとを受け、引退した瞽女の日常生活から福祉面まで、世話を続けてこられた。貴重な資料も多く残されている。

親方であった杉本キクイの瞽女唄が無形文化財の選択を受けた昭和 45 年ごろには、瞽女ブームとも呼べる一時期があった。小説、映画、演劇だけでなく、マスメディアにも扱われた。一時的なブームとは別に、心象的な絵画を発表した斎藤真一画伯の作品と著作は、いまだに熱心な人々に感動を与え続けている。一方、斎藤真一作品のコレクターである池田敏章氏は、本会の尽力により、蒐集した作品と資料を上越市に寄贈された。また近年、様々な視点から、越後瞽女に関心を寄せる人々が増えている。市川会長のもとを訪れ、瞽女をテーマに活動を始める人々も多い。国立民族学博物館には、常設コーナーが作られた。また、最後の瞽女たちに習い、三味線と瞽女唄と語りの芸を受け継ぐ新しい世代がいる。

1-3 普遍的な価値を見直す

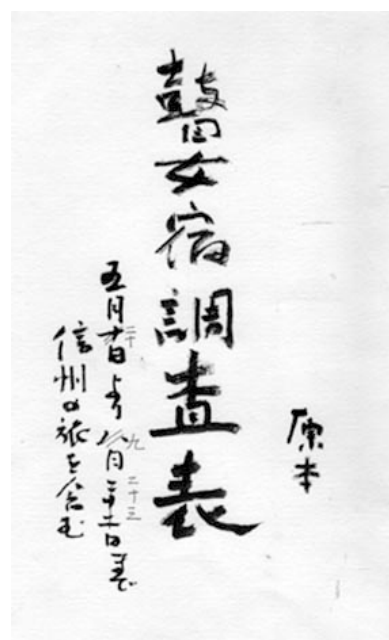
しかし一般的に、盲目の旅芸人という先入観から、瞽女には暗く哀しいイメージが付きまとう。地元の高田でさえ、瞽女は気の毒だとのみ思っている人が多い。

私たちは、高田瞽女の本当の生き方を知り、最後まで新潟に瞽女が生き続けられたことを、より多くの人々に伝えることで、地域資産として発信することを目指している。雪国の人々がはぐくんできた民間福祉と相互扶助の精神は、瞽女がいなくなった今日でも普遍的な価値であり、現代に生きる私たちが求めるものである。

2 『高田瞽女どこでもガイド』の使い方

2-1 知らない人に知ってもらう

記録とともに人々の記憶に残る「高田瞽女」である



昭和 12 年頃の瞽女宿調査票
(市川信次氏・信夫氏の資料)



斎藤真一著「越後瞽女日記」より
高田の雁木と瞽女作品



高田寺町の天林寺で瞽女唄を
奉納する継承者の月岡祐紀子さん

が、城下町高田と頸城地方の歴史風土、瞽女組織の制度、医療と障害、旅と日常生活、音楽と語りというように、種々のジャンルにわたるテーマを内包している。その糸口を見つけることは容易ではない。

本会はホームページを開設し、会員向けの会報と案内、パンフレットの印刷配布を行い、高齢者世代を中心に成果を得てきた。しかし、マップの情報量は限られているうえに、地域の瞽女宿調査を行うたびに、新たな情報が増えていくので、ホームページとブログで対応するほかなかった。

そこで若い世代と今まで関心の低かった層への発信するシステムを作った。どこにいても簡単にネット上の糸口を見つけて、瞽女にまつわる話題を検索しながら、奥深い瞽女の世界に触れることができる。GPS機能をリンクして、目的地に誘導することも可能である。小さな糸を繰るうちに、いつか地域資源の再発見に至り、広義の「個人観光」に発展することを目指している。

2-2 観光ツールのひとつとして

本会が話題を提供し、諸活動への参加を促進することを目的に、名刺サイズ二つ折りのQRコード入りのカードを作った。QRコードから常に最新情報を提供するホームページに到達できる。本会会員だけでなく、観光案内所やイベント案内スペースにも配布している。

さらに、QRカードとリンクして市街地の瞽女ゆかりの地を紹介する地図を作成した。ディスプレイだけでなく、手に取って見られる地図は重宝するし、まち歩きの思い出になるだろう。高田は戦災を免れたおかげで、昔の城下町の骨格がよく残っている。明治末から大正期頃の古地図と現在の市街地図を表裏で比較しながら、開府四百年を迎える城下町高田の都市構造と歴史を具体的に見ることができる。

また、瞽女の最盛期には、雁木通りと辻に17軒の瞽女の家が集中していた。今も残っているのは東本町の旧杉本家だけであるが、肩を寄せ合うように並ぶ細い町家が、雁木でつながって地域コミュニティを形作っていたことが理解できる。瞽女と縁の深い寺社と本会活動の拠点もあわせて紹介している。



二つ折り名刺判QRカード外面



二つ折り名刺判QRカード内面



大正時代頃の高田市街地図

江戸時代の町の骨格はほとんど変わっていない。今日の町の形にも近い。

さらに、高田瞽女に関連する商品を販売する店舗と商品の特徴を記載したので、まち歩きの途中でオリジナル土産品を求める人にも便利である。買い手と売り手の何気ない交流から導かれる情報は確かであり、一層印象が深まるだろう。

2-3 イベントと関連商品の効果

本会のイベントの中で、秋または冬に実施しているが、雁木町家で瞽女が門付けする風景を再現するものが一番賑わっている。

角巻を羽織り、3人の瞽女が連なって雁木の下を歩く姿は、昔懐かしい冬景色の一つだった。既に瞽女はいないが、瞽女唄継承者とともに、門付け唄を唄う。登録文化財である町家の内部も公開している。単なる写真愛好家の被写体ではなく、高田瞽女のイメージアップと雁木の街なみ景観向上のために、話題提供として行ってきた。吹雪の時は雁木の役割を実感できる。雪国の特徴的な町家の構造と使い方から、昔の知恵を知ることができる」と好評である。

本事業では高田瞽女の拠点施設の整備を目標として、幅1m、長さ2.2mの店頭幕を新調した。頸城の農村を連なって歩く瞽女と妙高山の絵柄は、斎藤真一作品を連想するが、若い世代の作品である。オリジナル商品として、深紅に染めた瞽女手拭と手提げ袋も開発した。大量生産ではないが、高品質の絹素材をあしらい、和装職人が手作りしている。実は、本会の事務局長を兼務する「きものの小川」のオリジナルであり、熱心な活動の中から生まれた商品である。ほかの企画商品もすべて地域産品で、店頭販売以外にも瞽女関連行事の折に出店販売を行っている。これらはネット上にも紹介している。

このような本会の活動が発端になって、最近は瞽女が連なって歩く姿が見直されてきたと感じている。以前は哀れで気の毒なイメージが先行したが、芸を身に付けて堂々とたくましく生きた力強さを感じるという声を耳にするようになった。

3 交流の発展にむけて

3-1 瞽女の記憶を継承する

本事業では高田市街地を中心にして、瞽女の暮らし



雁木に掲げる大判の店頭幕を
2月の恒例行事で雁木に掲げた。



高田の雁木で瞽女の門付風景を再現する。

たまちを紹介した。さらに今までの諸活動を通じて、高田瞽女の全体像を記録すべき時である。

とくに農村部では瞽女を知る世代が高齢化して集落の荒廃も進み、貴重な体験と知見を継承できない状況に瀕している。故斎藤真一氏の著作に記された瞽女宿の半分はない。建物が残っていても世代交代などで、記憶は残っていなかった。

今夏、高田瞽女が通った信越県境の峠道を調査して、県境のそれぞれの集落に、高田瞽女をはっきりと覚えている人々に話を聞く貴重な機会を得た。「平成版瞽女宿の記憶」としてまとめた。(文化庁補助事業)ただし、長野県佐久方面については、今後の追跡調査が必要である。今後、年を経ずして、残っている記憶が途絶えるかもしれない。

3-2 市外県外への発信

さて、越後の瞽女さんは、なぜ最後まで残ることができたのだろうか。それは米どころ新潟の特長である。農家では、苦しい時も瞽女さんに渡す分の米を、常に準備していたという。施しではなく、持ちつ持たれつの対等な相互扶助の関係が築かれていた。雪国の深い人情と、昔から助け合って生きてきた雁木町家の暮らしがあるからかもしれない。

現代社会において、ともすれば置き忘れた思いやりと助け合いの気風は、次世代に継承すべき宝である。この地を訪れた人々が口をそろえて、「人の気持ちが温かく、素晴らしい」というのも、同じ気脈が通じているのではないだろうか。

この冬、試験的に実施した『冬の高田体験モニターツアー（本会主催、文化庁補助事業）』に参加した関東関西からの会員は、当地の飾らない優しさともてなしに感動し、食と風景の価値を認めて、また他の季節に再来することを希望されていた。

瞽女はもとより、各地の歴史資源を活かしたまちなみ観光が注目されている。北陸新幹線の開業を間近に控えて、東京だけでなく関西からの問い合わせも増えてきた。発信力を高めると同時に、様々な立場の来訪者に対応できるプログラム整備を求められるだろう。



上牧集落での聞き取り調査



下樽本集落での聞き取り調査



塩の道資料館で地元まちづくりの関係者と11月4日に交流。



2月8日の冬の高田体験ツアーで町家内部を見学して説明を聞く。

最後に

本事業を行い、高田の市街地を中心に、警女ゆかりのポイントから、まち歩きの情報と楽しさを増幅することができるようになった。これらの情報発信により、外部の情報源とも交流する機会が増えていく。

しかし、大切なものは「もの」よりも「人」である。マニュアルはすぐに覚えられるが、人を簡単に育てることはできない。警女は既にないが、警女と共に生きた地域の誇りを、次世代に受け継がなければならないと考える。

参考文献・資料

市川信次『警女宿調査記録』（市川信夫所蔵）

市川信夫『ふみ子の海』 理論社

大山真人『ある警女宿の没落』、『高田警女最後』 音楽之友社

国見修二『警女歩く』、『警女と七つの峠』 玲風書房

斎藤真一『越後警女日記』 河出書房新社

斎藤真一『警女 盲目の旅芸人』、『絵日記 警女を訪ねて』 日本放送出版協会

斎藤真一『木村東介様 警女の画家・斎藤真一からの手紙』 不忍画廊

上越市立博物館 編 『斎藤真一が描く 高田警女 越後警女日記展』

伊東喜雄『警女さんの唄が聞こえる』（短編映画）

大島渚『警女 盲目の女旅芸人』（短編映画）上越地域広域視聴覚ライブラリ所蔵



本事業で現在の高田市街地に残された警女のゆかりをたずねる地図を作成した。